



<http://mizuho-kai.jp/>



医療法人社団 みずほ会

広島市中区袋町5-13JDS袋町ビル5F
TEL082-242-0102

〈事業所〉

■ 清水歯科医院
広島県広島市中区基町11-5-2F
TEL082-227-5365

■ ゆず歯科医院
広島県広島市西区横川町3-2-36
TEL082-296-4224

■ 高陽歯科医院
広島県広島市安佐北区真亀3-3-16
TEL082-842-2688

■ 倉掛歯科医院
広島県広島市安佐北区倉掛3-40-3
TEL082-843-2699

■ 亀崎歯科医院
広島県広島市安佐北区亀崎1-2-26-2F
TEL082-842-0648

■ 久地歯科医院
広島県広島市安佐北区安佐町久地1207-1
TEL082-837-1155

■ 伏見町歯科クリニック
広島県福山市伏見町4-20
TEL084-922-8474

■ 蔵王歯科医院
広島県福山市南蔵王町5-9-18-3F
TEL084-943-8600

■ 真壁歯科医院
岡山県総社市真壁字下高原東1638-16
TEL0866-93-6740

■ 土原歯科医院
山口県萩市土原字川島沖田488-3
TEL0838-25-0380

■ タートルズ歯科クリニック
東京都江東区亀戸5-14-3
TEL03-3682-6225

■ アーク歯科クリニック
神奈川県横浜市戸塚区戸塚町120-9
TEL045-862-3561

■ アール歯科庄内通
愛知県名古屋市中区又穂町6-29
TEL 外来診療 052-532-8787

訪問診療 0120-118-307

■ アール歯科クリニック
愛知県名古屋市中区南大高2-450-2F
TEL052-626-2843

■ 訪問歯科診療部
広島県広島市袋町5-13-7F
TEL082-242-2555

■ 歯科技工所コロナ歯研
広島県広島市袋町5-13-6F
TEL082-242-2550



清水肇先生

理事長 ただし、乳歯が動かず、永久歯が違う場所に生えてきたり、ゆがんで生えたりしてしまったときには、歯医者さんをお願いしてくだ

編集長 親の体験も大事なですね。

も貴重な人生経験。むし歯の痛みだっていい経験ですよ。親になつて、この体験が子育てに自信を持たせてくれるかも。オーバーかな。あはは。

編集長 永久歯への生え替わりは、いろんな意味で大切な時期なんですね。生え替わりは大人への第一歩。自立心もここから、ですね。

さい。たいていの歯は顎の成長と共にそろってきます。歯並びは遺伝によるところが大きく、顎や歯の大きさはどちらかの親に似ます。永久歯列が完成した時点で矯正をすればいいんです。

理事長 それはいいことなんです。乳歯のむし歯よりも生え替わる5、6歳の頃は大事なんです。生え替わる時期は歯茎も汚れやすく、永久歯も軟らかいので傷つきやすく、むし歯になりやすいので、気を付ける必要があります。この頃から歯磨き習慣もついて一人できるようにしますが、しっかりと磨けているかどうか、チェックしてみてください。市販の歯垢染色液で確認するといいでしょ。保護者だけでなく子どもと一緒に

にね。正しい歯磨き習慣をつけ、自分で確認できるように。なつてほしいですね。

編集長 生え替わる時つて、グラグラする歯が気になつて何度も触ったりしてしまいますよね。それと、乳歯のむし歯は減っているとはいえ、生え替わるからと放置していいんでしょうか。

理事長 グラグラしているようだったら、治療は必要ありません。乳歯は抜ける準備をしていて、根っこは新しい歯に吸収されていきますし、神経も分断されて痛みを感じにくくなっています。

これも成長の証ですから、気になるなら、自分で抜いちゃつてもいい。抜くタイミングや痛みも、グラグラする気持ち悪さも、自分で抜いた時の「やった！」感やすっきり感

編集長の「知らなかった。」レポート。

子どものお口、生え替わりは大人への第一歩。

「永久歯への生え替わりは一生に一度しかない大事な時なんですよ」と「医療法人社団みずほ会」理事長清水肇先生は言います。夏休みは、その時を迎えた子どもさんやお孫さんのお口の中を観察するチャンスです。歯の生え替わりは、子どもの体の成長と変化の始まりだけでなく、「大人への第一歩」なのだそうですよ。



スケッチに込めた 小さな町の記憶 (山口県萩市)



萩はスケッチモチーフの宝庫だ。

山口県の日本海側に佇むこの小さな町は、かつての城下町。白壁の町並みと武家屋敷が残るその風景には、時間がゆっくりと流れているような錯覚さえ覚える。

細い路地に入ると、そこに暮らす人々の息づかいが近くなる。市内を縫うように流れている藍場川のほとりに立つ古い民家、庭先に咲く花や、干された洗濯物。どれも描きたくなる対象だった。観光名所ではない日常の風景こそが、スケッチに最もふさわしいと僕は思っている。

きっかけは、ある勉強会だった。そこで懇意になった方が、「週末は萩で過ごしているんです」と笑顔で話してくれた。広島での暮らしの合間を縫って、出身地である萩に小さな平屋を借り、週末になるとふらりと戻ると言う。

「よかつたら、今度来てみませんか？」
思いがけない誘いに少々戸惑ったが、「行きます！」と答えた。

数週間後、私たち夫婦はその町に立っていた。橋本川沿いにあるその平屋は、

思ったよりもごんまりとしていて、素朴で温かな家だった。

以後、何度か訪れ、昼間は萩市内をブラブラして気に入った風景があるとスケッチし、夜は近くの漁港に揚がった魚などでおいしい食事、とても楽しい時間を過ごした。

残念ながら、その方は昨年天に召され、もうその家に行くことは叶わなくなった。スケッチは、記憶を写真とは違うかたちで残してくれる。風や匂いや音、その時の気持ちまでも一緒に、絵の中に封じ込めてくれる。

その平屋から歩いて1分のところから対岸を描いたこのスケッチには、あの小さな平屋のぬくもりと、亡くなられたF先生の優しい笑顔の記憶がこもっている。

文・絵／佐々木純（ささき じゅんいち）

1952年広島市生まれ。若草コーヒー店主。少年期から絵が好きだった。2008年から廿日市市や広島市などで作品展を開く。

ニッポン列島矛盾旅情

アーサーの
言葉



博物館や公園、ショップ、レストラン、慰霊施設も（白老町）



昔から三原駅前では旅人を迎えている看板

「日々旅にして旅を栖とす」

松尾芭蕉はそう言つて「奥の細道」に出かけた。

普段から慣れ親しんでいる土地でも、旅のつもりになって歩いてみると、景色が違って見え、新しい気づきがある。

今年の初め、友人といっしょに車で関西を巡ろうと決め、三原から夜遅く出発することになった。ぼくはまず広島駅から山陽本線に乗り、何度も降りたことがある三原駅の、だだっ広くて代わり映えのしない駅前のロータリーへ出た。すると、植え込みに立てられた珍しい看板が目についた。

「ようこそ たこのまち みはら」

鉢巻きをした元気そうな蛸が派手に描かれ、足元には蛸壺がいっぱいあしらつてある。これまで三原の蛸料理をいろいろ食べてきたし、料理人と漁師からは水揚げ量の減少を嘆く声も聞いた。初めて見る「たこのまち」の看板が宣言のように思え、「三原市はやっと蛸のために水質問題に取り組む気になったか」と、立ち止まって見入っていた。

そこへ友人がきた。「おもしろい看板ができたね」とぼくが言うと、「昔からあるよ」と笑われた。どうやら今まで、自分が見向きもせず素通りしていたらしい。蛸にはメリットなどないが、旅の始まりの記念に写真を撮つてもらった。

この列島の海岸線を廻ると、とびきり風光明媚なところには、だいたい原子力発電所が立っている。恐ろしく密集しているのは日本海の若狭湾と敦賀湾あたり。

今春、ラジオの取材のついでに訪れて、敦賀原発を見に行く途中、ガソリンスタンドへ寄つた。満タンになるのを待ち

ながらぼんやり見まわしたら、道路の向こうに「廻転寿司 海鮮アトム」と名乗る、にぎやかそうな店があった。

思い起こせば、茨城県東海村に原発がつくられた当初、地元の和菓子屋は「原子力ようかん」と「原子力まんじゅう」を売り出した。「海鮮アトム」は、そこまでわざとらしくはない。ただ、原子力発電所は必ず想像を絶する量の冷却水を使い、日本では海のそばにしか建てることできない。メルトダウンが起きなくても、普段からもろに影響を受けるのは海の生き物だ。従つて海産物を商売にする業者は、その話題を避けるというのが、世の常だ。

効果的な隠れ蓑となるのは「江戸前寿司」の系統。近代化以降、ずっと海に垂れ流されている工業の毒を、時代のすり替えによつて消し去り、まるで海洋汚染とは関係のない商品であるかのように感じさせる。

原子力の「アトム」を前面に出すのは、寿司屋として大胆なイメージ戦略だ。原発PRがどこよりも盛んな北陸ならではのネーミングか。

先だつて北海道へ出かけ、白老町の「ウポポイ」にお邪魔した。施設の正式な呼び名は「民族共生象徴空間」となっているが、あまり深く考えずに展示物を順々に見ていった。

狩猟を土台にして、高度な文明と言語を築いたアイヌ民族が、まず紹介される。そして明治維新以降、権力組織がどのようにその民族を潰そうとしたか、「心わかるような流れだ。熊をとることができないようにして、鹿もとれないよ



敦賀市の海鮮アトムの店舗はにぎわっていた



ウポポイの周りの看板もアイヌ語と英語が併記

Arthur Binard
(アーサー・ビナード)

アメリカ合衆国、ミシガン州生まれの詩人、絵本作家、翻訳家。ニューヨーク州コルゲート大学英米文学部を卒業後、来日。2001年、詩集『釣り上げては』で中原中也賞受賞

今はちゃんと英語のKEEP OUTとアイヌ語の「モンラ Ike ウタラ パテク」も併記して、親切に禁じてくれている。

あくまでシンボリックな「共生」に取り組んでいるわけだ。ぼくにとっていちばん象徴的な「展示物」は、館内じゃなくて裏の駐車場の入り口で見つけた。明治時代から「立入禁止」の札が北海道の大地のあちこちに立てられたが、日本語のみの命令だったはずだ。

今はアイヌ語を生活言語として使っている人はいない。言語と文明の復活に、もつとも欠かせない要素は、狩猟に違いない。しかしウポポイでできるのは、踊りと音楽のパフォーマンスくらい。「民族共生象徴空間」の「象徴」は、そのへんを表している気がする。

「強制」の時代が、やがて「共生」へと移り変わる。

展示物にはアイヌ語の解説もちゃんと付いている。ただ、今はアイヌ語を生活言語として使っている人はいない。

うにする。蛙がとれないようにして、柳葉魚すらとれなくする。猟場と漁場を、不動産にして囲ったり区切ったり、立ち入りを制限したりする。みんなを定住させて、教育ではアイヌ語を禁じる。「同化政策」はざっとそんなところか。

今だから、話そう。

文／平岡敬（元広島市長）
写真提供／広島市公文書館



広島アジア競技大会開会式。1994年10月2日 広島ビッグアーチ（安佐南区）

「届かなかった手紙」

日本で民間テレビ放送が始まったのは、一九五三年である。だが、庶民にとってテレビ受像機は高嶺の花。街角に設置された街頭テレビには、黒山の人だかりができた。草創期の人気番組はプロレス中継だった。大相撲を引退してプロレスラーになった力道山が「空手チョップ」で白人レスラーをなぎ倒すシーンに大衆は熱狂した。敗戦の屈辱を味わった日本人は、力道山の活躍を見て留飲を下げたのである。

力道山は朝鮮半島の出身。戦前、日本に渡る前に結婚して、女の子をもうけていた。その女性の名は金英淑。平壤の体育大学ではスポーツ選手として目立つ存在だったようだ。その後、体育相で朝鮮オリンピック委員長だった朴明哲氏の夫人となった。しかし、娘

との再会を果たせぬまま、力道山は一九六三年に暴力団の凶刃に倒れた。

それから三十一年が過ぎ、力道山の思い出も薄れてしまった一九九四年の秋、広島市は第十二回アジア競技大会を開いた。市長だった私は、この大会を「過性のイベントにすぎではない」と思っていた。

戦争中に日本によって多大の被害を受けたアジアの人たちの中には、広島・長崎への原爆投下によって、自分たちは日本の支配から脱することができたと考える人が少なくなかった。それゆえ、アジアからやって来る大勢の人に広島島の惨劇の実相と核廃絶への市民の努力を知らせることが重要だった。

広島アジア大会のテーマは「アジア諸国の平和と調和の促進」である。アジアの全ての国が広島に

集い、スポーツを通じて平和なアジアを創ることを目指していた。

ところが、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が参加しないと宣言してきた。北朝鮮は一九八五年に核兵器拡散防止条約に加盟したが一九九三年に脱退した。米国の圧力に対抗するため、核開発に踏み切ったのだ。

私は核武装に向かう北朝鮮こそ、広島に来て核兵器の非人道性を知ってほしかった。北朝鮮への接触方法を探っていた時、朝鮮問題に取り組んでいる知人から「アントニオ猪木参議院議員が北朝鮮を訪問する」という電話があった。プロレスラーの猪木氏は力道山の愛弟子である。恩師の娘に会って、父力道山の思いを伝えようとしていた。

私はさっそく金日成主席宛ての

手紙を書いた。「スポーツ交流によって、アジアの平和を確かなものにするため、ぜひ参加していただきたい」との趣旨である。参議院会館に猪木氏を訪ね、朴氏ルートで金主席に手紙を届けてほしいと頼んだ。彼は「わかった」と快く引き受けてくれた。握手した手は分厚かった。

七月に入って猪木氏は北京から平壤に入る予定で旅立った。

七月八日、金日成主席死去のニュースが世界を駆け巡った。平壤行きの航空便はストップ。猪木氏は空しく帰国した。

アジア大会は北朝鮮が参加しないまま、四十二の国・地域が集い、数々のレガシーを残して閉幕した。

後日、猪木氏から報告があった。「残念ながら、手紙を届けることができなかった」



新しく完成した広島駅ビル「minamoa」。JR西日本管内では大阪、京都に次ぐ規模という



夜の広島駅周辺。林立する高層ビルの灯火が街を照らす

ヒロシマの舞台



変わりゆく広島の玄関口。人々の思い出と感情の交錯する地

文・写真／宇城昇（ジャーナリスト）
うしろのぼる

毎日新聞広島支局専門記者。1994年毎日新聞社入社、社会部や科学環境部の記者やデスク、広島支局では記者、次長、支局長を務め4度目の勤務

この春、4度目の広島赴任を命じられ、2年ぶりに生まれ故郷の広島に戻ってきた。

勤め先は全国紙であり、社員の多くが文字通り全国を転々とする。私も15回の配属替えがあり、関東や西日本の計9都市に住んだが、高校を卒業するまで暮らした広島で人生の半分以上を過ごしている。よほど会社の上層部は私を広島で働かせたいらしい。

こんな人生は想像してもいなかった。「広島みたいな小さな町で一生暮らしたくない」。今思えば若気の至りからの暴言で恥ずかしい。家出を正当化するため、東京の大学に首尾良く合格し、広島を離れたのは1990年の

春だった。広島駅まで見送りに来てくれた友人の肩越しに見えた駅前には、名前こそ大仰な「広島百貨店」をはじめ低層の雑居ビルが立ち並んでいた。

初めて広島で勤務することになったのは2006年。高校卒業から16年の空白を経て戻ってくると、広島駅の南口には「エールエール」のビルが巨大な白壁のようになり、駅ビルも「ASSE（アッセ）」としゃれた名称に変わっていた。一方で周辺では再開発計画がなかなか進まず、愛友市場をはじめ「昭和レトロ」の雰囲気が残っていた。2度目の広島勤務を終えて関西に移った2013年春の時点でも、大きな変化はなかった。

広島駅周辺の変容はその後に加速した。地上52階建ての超高層ビルが完成し、愛友市場も現代風の再開発ビルに建て替わった。帰省や出張で広島に戻り広島駅頭に立つたび、視界に映る空が狭くなっていくのを実感した。

2020年春、3度目の広島赴任はアッセの閉店と同時期だった。それから広島駅ビルは全面建て替え工事に入った。そして「minamoa（ミナモア）」と名付けられた新駅ビルの完成に合わせたかのように、4度目の広島勤務が始まった。

この10年ばかり、私は毎日新聞社が所蔵する原爆投下前から復興初期の写真の整理に力を入れている。広島駅を撮った写真も数多く、昨年は未整理だったネガの中から、被爆半年後の広島駅界隈のカットを幾つか見つけた。空き地がまだ残る駅南口には、闇市や電車の



発掘されたネガを基に掲載した特集記事。2024年8月6日 毎日新聞朝刊

停留所に大勢の市民が集まっていた。モノクロの写真は戦後復興の第一歩を切り取っていた。旅立ち、出会い、始まり、再起……。駅にまつわる思い出や感情は人それぞれだ。戦後80年の節目に完成した新駅ビルと、またもや自分が故郷に戻ってきたことの奇縁。広島の玄関口を舞台にした人間模様を追いかけてみたくなった。

老医師の 徒然日記

1日目

ごきげんな人は
長生きする。

文／原田康夫（元広島大学学長）



切り絵／田添琉乃介

長生きも大変である。これも年を取ってみなければわからない。大事なのは、何事もくよくよしないことである。

医学者の坪田一男氏は『ごきげんな人は10年長生きできるポジティブ心理学入門』（文藝春秋）で、幸せな気持ちでいることが健康につながる」と説いている。同じことが、科学学術雑誌『サイエンス』の総説にも取り上げられている。要は、人が何と言おうが、自分がやりたいと思うことをやる人、それをすることに満足し、できたことに感謝する人は長生きできるようである。

長生きといえ、日本人の平均寿命は男81歳、女87歳くらいだが、大病はほぼ60歳代までに起るの

で、定年を過ぎれば、おめでたい人になるとよい。健康で経済的にも

問題がなくても、失意や生きる希望がなくなると、免疫能が落ち、闘争心もなくなり、「もういいわ」ということになる」と長生きできなくなる。

誰しも悩み、嫌なことのない人はいない。嫌なことはしないよい。1日に何度か声を出して笑う。上手でなくても声を出して歌う。仕事はできるだけ作っても続ける。

私は、1日何度も「ありがとう」を言う。今「ありがとうおじさんの毎日」というタイトルで日々の出来事を書き留めている。これも長生きのコツと思う。タクシーに乗っても降りる時に「ありがとう」と言えば、「またお願いします」と言ってくれる。幸せな気持ちになれる。

年を取ると足腰が悪くなる。現在、日本には4700万人のロコモ

ティブシンドローム患者がいるといわれている。町を歩いても足をひきずっている人が多い。膝、腰椎に問題がある人である。これは小さいときからの栄養が関係する。

瀬戸内の家庭では、朝食のイリコだし汁の味噌汁は食生活の基本であつた。私は被爆者だが、味噌汁づくりは妻を見送り独り身になった今でも毎日欠かさない。味噌汁を毎朝とり続けた被爆者は生存率が高いとの広島大学原爆放射能研究所の論文を読んだからである。発酵食品だから、骨と免疫能を高めるといふ。

朝の米飯は軽くし、まず西洋皿に大盛りのぶつ切りのキャベツとタマネギ、トマトに、ブドウの酢バルサミコをかけて食べている。これで長年の脂肪肝がよくなり、味噌汁と

合わせる」と快調である。夜の米飯も軽めで、お酒は小ビール1缶だけにしている。

長生きする人は、毎日の生活が規則正しい。自分なりの健康法も続けている。多くの人が、ラジオ体操か、自分なりの体操をしている。運動習慣も必要である。私も毎朝ストレッチ体操を行い、屋上で張りめぐらしたネットめがけて130球のゴルフボールを打つことを40年間続けている。ぼけ防止には、毎日することを決めて、自分のことは自分でした方がよい。

先月で94歳になった。今でも午前



フィンランドのスオメンリンナ島。要塞(ようさい)は往時の欧州軍事建造物として、ユネスコ世界遺産に登録されている。島内の見どころは約1.5kmのルートの中にあるのだが、はて、右か左か……何度も同じ道をウロウロ



2月のヘルシンキ市内。氷点下3度。脳ミソ凍結。トラムを下車した後、ホテルの方向が分からなくなった

地図の読めない女は、
スマホをグルグル

熟年オリンピック

迷走記 更新中

第2回

文・写真提供／曾根幹子
(広島市立大学名誉教授)

1952年三原市生まれ。1976年モントリオール五輪陸上・走り高跳び出場。専門は「スポーツ史」「スポーツ組織・団体のマネジメント」

関西にあるR大学の教授に、今春から本誌で「迷走記録更新中」というコラムの連載をする話をした。「曾根さんを的確に表現したタイトルですわね」と、やたら感心する。彼はかつての共同研究者で、25年来の飲み友達だ。論理的で説得力があり、トークもうまい。尊敬しているが、私の話をいつも半分しか聞いていない。もしかしたら「迷走」が「酩酊」に聞こえたのかもしれない。

「いやいや、曾根さん、昔よく道を間違え、ネオン街を迷走してしましたよ」と、心当たりのあることを言う。それは若かりし頃の話。「事例」が多過ぎて、よく覚えていないから反論しない。今は歳を重ねたせいから飲まなく(飲めなく)なった。幸いにも、酔っぱらった「迷走武勇伝」は皆無となり、私にも多少、品格らしきものが生まれたような気がする。

私の迷走ぶりは、分かりやすく言えば「方向音痴」。自覚したのは、50年前。忘れもしない、ドイツのメインツ大学で合宿した時の出来事までさ

かのぼる。近くの森に一人で走りに行ったが、戻ってこれなくなり、5時間近く走り続けた。道標はあったが、どの場所を示しているのか分からない。樹海を彷徨っている感覚に陥った。夕方、森の出口でコーチが心配そうな顔をして立っていた。「助かった!」と思わず泣いてしまった。

最近は便利になった。スマートフォンに搭載されているグーグルマップを起動すれば、現在地や進む方向を教えてくれる。ところが、この「文明の利器」が思うように道案内をしない。堪忍袋の緒が切れて、ついにはスマホをグルグルと上下左右に回してみる。回せば回すほど、「私は今どこ?」の状態に。冒頭の教授に「グーグルの指示で街をさんざん歩かされた」と話したら、「方向音痴の人は、よくそう言います」と歯牙にもかけない。

ふと、25年前に出版された本を思い出した。タイトルは『話を聞かない男、地図が読めない女』(アラン・ピーズ／バラ・ピーズ著)。あれは私たちのことだったのか……。



mimoza HP

mimozaのコンセプトは、不登校・引きこもり・困難な問題を抱えている人たちが幸せを感じられるよう、人と人をつなぐ仕組みを作ること。黄色の小花をたくさん咲かせるミモザのように、人の心に小さな「ありがとうの花」を咲かせていきたい。花言葉は「感謝」「愛」「友情」。私たちの活動にびったり！そんな思いで立ち上げて2年が経過した。なんと時の過ぎるのは早いことかと思う。

物事は「出会いとタイミング」によって面白いように展開していく。それをmimozaの活動を通して味わった。以前の仕事で関わり続けていた不登校の男の子との出会いは忘れられない。その頃小学校4年生だったが、中学生になっても不登校は続いていた。精神的な疾患のある母親との二人暮らしで、世にいうヤングケアラーではないかと思われた。

まず、母親に自立生活をしてもらうために、二人を分離させなければ

と説得を続け、施設など住む場所を探した。ちょうどその頃、母親の入院という非常事態によって、母親の兄の家に住まわせてもらうことができた。図らずも、彼にとつては格好の別居のタイミングとなったのである。相変わらず不登校のままであったが、mimozaの仲間と一緒に広大な農地でタマネギの補植作業やニンニクの植え付け作業などをして共に汗をかくうちに、次第に心を開いてくれるようになった。

この春、中学を卒業し、定時制高校への入学が決まった。紆余曲折はありながらも、彼は立派に自分の進むべき道を一歩踏み出すことができ、何ともうれしい春となった。私たちも、彼によって誰かの役に立てていると実感させてもらうことができた。

そんな「出会いとタイミング」がもたらす喜びを不登校の子どもたちにもっと味わってほしいと思い、クッキング広場・トライ広場・ボードゲーム



の広場などいろいろと企画してみたが、参加者が少なく、悩み、落ち込んだ。その時「多世代交流拠点」という言葉に出合った。私たちの今の強みは元気な高齢者であることだ。「多世代交流拠点」になれば、私たちだって生き生きと活動する背中を次に続く世代に見せていくことができる。そう思うと、肩からふっと力が抜け、気持ちが軽くなった。

これからも応援してくれるみんなに感謝を忘れず、「出会いとタイミング」を大切に、元気で笑顔の花を咲かせながら生きて行こうと決意した。

mimozaはすっかり私の居場所に!!





CLEO hair international



Pacela

■ 予約専用電話 (082) 511-2470
■ 営業時間 10:00~20:00
■ 土・日・祝 10:00~19:00
■ 定休日 月曜日
広島市中区基町6-78 パセーラ9F
(リーガロイヤルホテル横)



完全予約制 | 有料Pあり



Hatchobori

■ 予約専用電話 (082) 962-4012
■ 営業時間 10:00~20:00
■ 土・日・祝 10:00~19:00
■ 定休日 月曜日
広島市中区鉄砲町10-13-8F
(カフェ・ペローチェのビル8F)



完全予約制



fika

■ 予約専用電話 (082) 545-3353
■ 営業時間 10:00~20:00
■ 土・日・祝 10:00~19:00
■ 定休日 月曜日
(その他休日はご確認ください。)
広島市中区袋町2-28 サカタビル2F



完全予約制



クレオヘア | 検索

cleo-hi.com



すべての、
白いもの
たちの

おくろみ うぶぎ、しお
ゆき、こおり、つき、こめ…



何度も何度も読み返した。叫びのような言葉はひたひたと静かで美しく、ピアノの旋律のように胸に入り込み、そして突き刺される。
ノーベル文学賞受賞者ハン・ガンの最新作『すべての、白いものたちの』。

私の母国語で白い色を表す言葉に、「ハヤン」と「ビン」がある。綿あめのようにひたすら清潔な白「ハヤン」とは違い、「ビン」は、生と死の寂しさをこもごもたたえた色である。私が書きたかったのは「ビン」についての本だった。

生まれてたった2時間で息を引き取った姉。雪のように真っ白なおくるみにくるまれた子は、母の胸から溢れる乳白色の乳を一度だけ口に含み、そのまま冷たくなった。作者はソウルと、過去に戦争で真っ白な瓦礫と化したワルシャワの街を舞台に、「私の生と体を貸し与える」ことによって、眼も見えぬうちに亡くなった姉

をよみがえらせようと、白いものたちを媒体にしながら鎮魂と再生の物語を紡ぎ始める。ろうそく

今、あなたに、私が白いものをあげるから。汚されても、汚されてもお、白いものを。ただ白くあるだけのものを、あなたに託す。息

寒さが兆しはじめたある朝、唇から漏れ出る息が初めて白く凝つたら、それは私たちが生きていくという証。…私たちの生命が確かな形をとって、ほの白く虚空に広がっていくという奇跡。白く笑う

白く笑う、という表現は…途方に暮れたように、寂しげに、こわれやすい清らかさをたたえて笑む顔。

白木蓮
インド・ヨーロッパ語では、空白blankと白blanc、黒blackと炎flameはみな同じ語源を持つ

ということ、彼女を読んだ。

白は全ての色の光が合わさった色、黒は全ての色絵具の混合物である。黒と白は表裏一体の関係をj持って成り立つ。生と死。終焉と再生。

私が白と聞いて最初に思い浮かんだのは、若くして亡くなった父のお骨だった。惜別の悲しみに潰れそうだった見送りの日、鉄の扉から出てきた父のお骨を見た時に、そのあまりに清浄な白の美しさにたじろいだ。いのちの色を取り去ったら、人間はこういうものなのだ。命の終焉と再生。なぜか救われたような気がしたのだ。

限りあるすべての命の営みがどうか優しさと輝きに満ちたものでありますようにと祈りたくなる一冊だった。

参考文献
『すべての、白いものたちのハン・ガン』(河出文庫)
文/児玉紀子(こだまのりこ)
カラーアナリスト